

## 35

## 『医家要語集』察脈要語について

中川 俊之

日本鍼灸研究会

杏雨書屋所蔵の『医家要語集』(乾 5339)は、曲直瀬道三が元龜3年(1572)に著した全87葉の漢文体の写本である。目録題は「要語集」、巻頭には「医家要語集」と表記される。内容は「察脈要語」以下18種の要語で構成され、各条文ごとに引用文献名が記載される。本発表では、曲直瀬道三の脈診を窺う一端として、『医家要語集』冒頭の察脈要語における脈状記載を中心に検討を行う。

## 【道三の脈書と脈診記載】

道三の脈診資料には、『医家要語集』(1572)の「察脈要語」のほか、『類證弁異全九集』(1544)巻之一、『診切枢要』(1566)、『脈論』(1571?)、『診脈口伝集』(1577)、『脈訳簡略』、『切紙』(1582成書)の「脈訣刊誤撮要」中の「診切・博約之次序」等を挙げることができる。

## 【内容】

『医家要語集』察脈要語は脈診の要点を29条にわたり記載する。冒頭では「陰陽區別」「左右氣血」の条を配して脈の基本を述べる。「沈骨弦筋」から「悪脈再察」までは脈證、脈状と症状の対応、予後不良の脈を述べる。「婦人胎弁」は妊娠や胎児の性別を述べ、「虎口歌括」は幼児の診断を述べる。29条のうち、2条は脈状を述べず病證のみを述べている。29条のうち13条が『診切枢要』の同文あるいは類文であることから、『診切枢要』との関連が示唆される。

引用は必ずしも原文に忠実では無い。例えば「婦人胎弁」は、『医学正伝』婦人科中・胎前の引用する『脈経』の経文で構成されるが、「手少陰之脈動甚」を「心脈」、「尺中腎脈」を「腎脈」とする。

## 【引用医書】

引用文献名は、『医学正伝』9回、『丹溪脈訣』4回、『丹溪心法』2回、『脈経』2回、『内経』2回、『玉機微義』、『外科精義』、『医経小学』、『外科正宗』、『明医雜著』、『衛生宝鑑』、『惠濟方』、『東垣十書』、『蘭室秘蔵』(以上各1回)の14書目見られる。「左部剋右」のみ引用書の記載が無いが、『診家枢要』では『脈経』の引用とする。ただし、『脈経』に同内容の文は見られない。『内経』(「内経」もしくは「経曰」)は2回引かれているが、「病脈相反」には典拠を挙げずに『素問』玉機真藏論第十九、「形脈氣応」に三部九候論第二十が引かれている。また『丹溪脈訣』の引用とする4条の文は、全て『脈経』巻第一に同文あるいは類文が見られる。前述のように引用書の種類は『診切枢要』と多く重複するが、『診切枢要』では、道三の奥書に「於丹溪脈訣上下卷中。集於治法」と有るように『丹溪脈訣』の引用が最も多い。

## 【脈状】脈状記載の内容は以下の通りである。

(1) 脈状や部位を陰陽で規定する。(2) 脈診の基準を述べる(浮脈と沈脈=脈の権衡、數脈、大脈=陰虛陽虛、遲脈と疾脈=寒熱、有力と無力=虛実)。(3) 病態を脈状で弁別する(骨と筋[沈脈と弦脈])、(濕と癆[滑脈と濇脈])、(氣血の不足[濇脈と大脈])、(血證[芤脈、濇脈])、(麻痺痺木[浮而緩=濕・麻痺、緊而浮=寒・痛痺、濇而芤=死血・木])、(腹痛[弦脈と滑脈])、(汗[大而虛、浮而軟。在寸、在尺])。(4) 診脈部位(陰陽位)と脈状(微脈、弦脈)の関係を述べる。(5) 診脈部位(寸関尺)と脈状の関係を述べる(九道脈と七表八裏脈の比較)。(6) 脈状による病證の予後を述べる(病證と脈状、形態と脈状、四時)。(7) 四脈(浮沈遲數)を述べる。(8) 予後不良の病證と脈診を述べる。(9) 妊娠や男女の弁別、小児の診察を述べる。